福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

リコーダー学習におけるサミングの指導のあり方と教材開発：小学校における教師と子どもの実態を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 龍雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/3049

リコーダー学習におけるサミングの指導のあり方と教材開発

ー小学校における教師と子どもの実態を通してー

橋　本　龍　雄

(2001年８月31日受付)

本研究は小学校音楽教育におけるリコーダーを用いた授業実践（特にサミングの指導）から生じる問題点を、教師と子どもの実態を通して考察し、これからサミングの指導のあり方を探ると共に、教材開発の視点を検討して教材開発を行った。

Ⅰ　研究の目的と方法

１．研究の目的

本研究では、小学校における器楽指導の中心的な存在であるソプラノ・リコーダー（以後「リコーダー」という）を取り上げる。

2002年４月より施行される小学校学習指導要領[1]（以降「新指導要領」という）の「第２章第６節　音楽」では、「第３学年及び第４学年」の「２内容」、「A 表現」の「(3)歌い方や楽器の演奏の仕方を身に付けるようにする。」の項や、「第３　指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の項において、小学３年生から「音色に気を付けて」演奏を行うことができる旋律楽器はリコーダーが最適であり、作音楽器としてのリコーダーの活用が位置付けられた[2]。現行の学習指導要領（平成元年３月）での「リコーダーに親しみ、簡単な旋律を演奏すること（第３学年)」から、新指導要領はリコーダーを使った学習をより充実する方向に向かうべき指針と読み取ることができよう。

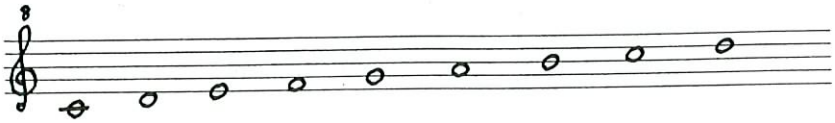
筆者は昨年、戦後わが国のリコーダー指導と教材の特徴を分析・整理し、小学校３年生からのリコーダーの導入期におけるこれからのリコーダー指導のあり方を、開発した教材を通して提案した[3]。

その中で教師が今後最も力を入れるべき課題は、子どもの現実を直視する姿勢と、子どもどうしの教育力を引き出し高めるための授業の組織化と教材開発であった。また今後の実践上の問題として残されたのが導入期以降のリコーダー指導のあり方であった。

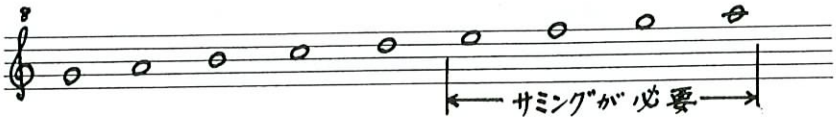
導入期以降のリコーダー指導に関して、実践上技術的側面として避けては通れない大きな課題の一つは、サミングであろう。サミングとは、英語で thumbing と書き文字通り親指(thumb)の動

きを意味する用語で、親指を少し動かしてリコーダーのサム・ホールに隙間を生じさせることよって１オクターブ高い音を出すための親指の操作をいう。教科書では、（楽譜１）のように導入期（小学３年生）においては中音域を中心に低音域も学習し、４年生では高音域もその範囲となり、高音域においてサミングは子どもにとっても避けて通ることのできない学習課題である。またリコーダーの最もよく鳴る（リコーダーの特性が十分発揮して音がよく響く）音域についてもサミングは非常に重要である（楽譜２）。

（楽譜１）



（楽譜２）



リコーダー指導において重要な位置をしめるサミングの指導の現状はどうであろうか。

サミングの指導は、タンギングのように注意深く時間をかけて指導されることはほとんどないというのが実情であろう。その主な要因は、

① ４年生１年間の学習内容が３年生よりかなり増加していることから生じる、リコーダーの学習時間の減少による。

② 教師の子どもへの具体的なタンギングの指導に関する知識や経験の不足による自信のなさ。

③ 音を作るという教育の視点の欠如による。

④ 子どもの実態を見ないで、サミングの「やり方」だけを子どもに教える。

の４点が挙げられよう。具体的には次のような場面が生じている。

現行教科書では、３年生のリコーダー導入期にはタンギングをはじめ、かなり多くのページを割いているが、サミングを扱う４年生では説明とともに１ページ程度の扱いである。リコーダー以外の学習内容が４年生では非常に多くなり、３年生と比べるとリコーダー、特にサミングの扱いはかなり薄いといえる。このことはそのまま学校現場の授業内容や学習時間に反映している。３年生と４年生の学習内容を比べると、例えば教育出版の３年生の教科書は５つの題材構成のうち４つで構成されているが、４年生では、「音楽のしくみやかたち」が加わって５つすべての題材構成から成り立つ。その分学習内容は多くなり、リコーダー指導の時間は３年生よりはるかに少なくなってしまう。そのために、教師にとってたとえサミングの必要性は理解していても、３年生と同じほど指導に時間をかけることはない。「親指を動かして教科書の写真のような形にし

て高いミの音をだします。やってみましょう。」と言い、子どもが音を出し、教科書の楽譜を数回演奏して終る。このように通過儀礼のごとく短時間でサミングの指導が終り、それ以降新しい楽曲を演奏する際には「サミングは学習済み」、または「指導済み」として扱い、「サミングを教えたのに子どもはできない。」と評価している教師の姿がある。

教育方法においても、これまで演奏の間違いをなくすことに主眼が置かれた授業が展開されてきたといっても過言ではなく、導入期で音を間違わずに吹くことで良しとする指導の悪影響は、4年生になって高いミの音を指導する時に最も大きくなる。高いミの音はサミングをして得るべき音なのだが、音さえ鳴らすのであればサミングをしないで強く吹けば鳴るのである。間違わずに吹くことで良しとしてきた教師の指導を受けてきた子どもは、サミングをせずに高いミの音を出しても疑問を感じることは少ない。3年生以来、音を作るという視点をぬきにして1年間以上リコーダーを指導してきた教師の指導の弊害が、4年生になって高いミの音で表面化するのである。リコーダーは作音楽器であるという音楽教育の上で最も基本的かつ最も重要なこととして、現場の教師が十分理解しているとは言えないのである。

以上のことからサミングの指導のあり方を考えることによって、導入期以降の作音楽器としてのリコーダー指導のあり方、音を作ることの重要性ひいては来年度より実施される学習指導要領における音楽科の授業時間が激減することへの対応に示唆を得ることができると思われる。

2．先行研究

本研究のテーマに関連する研究としては、北村俊彦（1988)「私のリコーダー指導　サミング・サミング」[4]や柳生力（1978)「学級におけるリコーダー指導の研究」[5]があげられる。前者はサミングの指導をめぐる教師の姿と子どもの姿を抽出し、そこから指導方法や教材の提案を行っている。後者は、高音域（楽譜2）を演奏するための技術的要点として、オクターブ・ホール、呼気、口腔の3点をあげ、子どもへの指導の実際として実践の具体例を提案している。両者には小学生を対象とした自身の教育実践を根底にして研究されていることが共通している。

一方、広く一般を対象としているものでは、アルト・リコーダーを主体とし[6]、高音域を演奏するのに欠かせない奏法の一つとしてサミングを解説し、その方法論を論じているものとして、A．ローランド・ジョーンズ（西岡信雄訳)(1967)「リコーダーのテクニック」[7]や、ハンス・マルティン・リンデ（北御門文雄訳)「リコーダー演奏の技法」[8]、矢沢千宜（1972)「アルト・リコーダー演奏の技法　上巻」[9]、矢沢千宜（1974)「　同　　下巻」[10]があげられる。

3．研究の方法

本研究では、ソプラノ・リコーダーの指導の一環として小学校4年生より行われるサミングの指導に焦点を当て、教師の指導の実態と学習初期の子どもの実態を明らかにし、リコーダー指導におけるサミングの指導のあり方を探る。また教材開発の視点を検討し、それに基づいて開発し

た教材を提案する。教師の指導の実態については、1993年から2001年までの９年間に、リコーダーの研修会に参加した愛知県以西の1,115人の教師へのアンケート（質問紙法）による。

1　文部省告示（1998）「小学校学習指導要領（平成10年12月）」，大蔵省印刷局。
2　橋本龍雄（2000）「21世紀の小学校におけるリコーダー指導のあり方についての提案　－導入期における教材開発を通して－」，福井大学教育地域科学部紀要，第Ⅳ部　芸術・体育学（音楽編）第33号，５頁。
3　橋本龍雄（2000），前掲書。
4　北村俊彦（1988)「私のリコーダー指導　サミング・サミング」(『会報』No.36，No.37，６～７頁，東京リコーダー協会）
5　柳生力（1978）「学級におけるリコーダー指導の研究」，音楽之友社。
6　今日実際に使われているリコーダーは６種類（Ｃ管３種類、Ｆ管３種類）あるが、この中で最も役割が多く、音色的にも最も中庸な楽器は、いわゆるアルト・リコーダー（トレブル・リコーダー）である。本来、楽器の発展の歴史からみてもアルト・リコーダーが６種類のリコーダーの中心であり、リコーダーの入門者はアルト・リコーダーから練習を始めるのが一般的である。わが国の学校教育においては、小学生が扱える大きさで、ドイツの音楽教育を参考にして、ヒトラー・ユーゲントの使用した鼓笛用の「縦笛」、つまりドイツ式運指のソプラノ・リコーダーをモデルとして小学校から導入された、といわれている。
7　Ａ．ローランド・ジョーンズ（西岡信雄訳)(1967)「リコーダーのテクニック」,音楽之友社。
8　ハンス・マルティン・リンデ（北御門文雄訳)(記載なし)「リコーダー演奏の技法」，日本ショット。原著はショット社より1958年発行。
9　矢沢千宜（1972)「アルト・リコーダー演奏の技法　上巻」，シンフォニア。
10　矢沢千宜（1974)「アルト・リコーダー演奏の技法　下巻」，シンフォニア。

Ⅱ　サミング指導における教師の自己評価の様相

筆者は2000年３月まで22年間、小学校現場において子どもの生活における知識や経験を基にした音楽の授業に取り組み、その一環としてリコーダー指導を行ってきた。学校現場における音楽教育に関する実践上の情報交換の場は、主に市や郡等の教育研究協議会（音楽部会）であり、そこでは顔見知りの教師から具体的な実践の話を聞くことができる。会話の中で常に話題になるのは、他市や他府県の教師はどのような実践を行いどのような悩みを持っているのかである。実践上の悩みは自分たちと同じなのか、違う質のものなのか。子どもの実態はどうなのか。自分の実践や授業の方向性はこれでよいのだろうか等々。これらの悩みや不安は積極的に前向きに授業を行う限り常に意識に上がってくるといってもよいだろう。実践に関する情報は他にも音楽教育関係の雑誌[1]等に求めてはいるが、掲載されている内容は、ほとんどが「うまくいった」実践事例である。現場の教師が最も知りたい情報の一つは、「うまくいかない、あるいは失敗した」実践事例であり、その授業を実践した教師の悩みであり、子どもの実態なのである。雑誌等に掲載される実践の中の子どもは実に行動的であり、けんか等の争いや授業中教室から飛び出す子がいない。音楽の授業そのものが成立している。「うまくいった」実践に学ぼうという気持ちは大いにあっても、自分自身の実践と掲載される実践との間には非常に大きな隔たりがあるように感じるのである。その間を埋めるもの、つまりきれいごとでは片付けることができない、現実の子どもの姿や教師同志の関係の問題も含めた様々な「現場の悩み」の共有であり、その中から一歩でも前に進むことができるような情報を現場の教師は求めているのである。

サミングの指導は、導入期のタンギングの指導とともにリコーダーの学習においては非常に重要な学習課題であるが、学校現場ではこれまでさほど問題にならなかった。指導がうまくいっているからなのか、教師がその問題に気づいてないからか、あるいは指導そのものが行われていないからなのか、現状はどうなのだろうか。指導上の悩みとともにその様相を質問紙によるアンケートを通して考察する。

１．調査の方法と内容

質問紙法による調査は、1993年より2001年まで毎年８月ごろに行われる大阪府教育委員会や東京リコーダー協会[2]の主催する小学校教師を対象としたリコーダー指導に関する研修会に参加した小学校教師計1,115人を対象に実施した。調査対象者学校所在地及び実施日は次の通りである。

調査実施日	対象者所属校所在地（府県名）	人　数
1993年８月23～24日	兵庫・大阪・広島・岡山・高知・愛知・京都・和歌山	85人
1994年８月23～24日	兵庫・大阪・広島・岡山・愛知・京都・和歌山	49人
1996年８月３～４日	大阪	182人
1997年８月５～６日	大阪	193人

1997年８月25～26日	兵庫・大阪・広島・岡山・愛知・京都・奈良・三重	87人
1998年８月５～７日	大阪	173人
2000年８月10～11日	兵庫・大阪・広島・岡山・愛知・京都・奈良・三重・滋賀・岐阜	109人
2000年８月28～29日	兵庫・大阪・広島・岡山・愛知・京都・奈良・三重・滋賀・福岡	82人
2001年８月28～29日	兵庫・大阪・広島・岡山・愛知・京都・奈良・三重・和歌山・富山	155人
	計	1,115人

調査における質問紙は３項目の質問から成り立っている。質問内容及び質問項目は次の通り。

(1)　内容：サミング指導における教師自身の評定

項目：「サミングの指導はうまくいっていると思いますか。数字に○をして下さい。

うまくいっている　←５－４－３－２－１→　うまくいってない」

(2)　内容：使用教材について

項目：「サミングの指導ではどのような教材を使っていますか。数字に○をして下さい。（複数回答可）」

１．教科書　　２．市販の教材集（曲集）「教材名：　　」

３．その他（　　）

(3)　内容：指導上の悩み等について

項目：「サミングの指導で困っていることはありませんか。」

２．回答結果の内容別分析

(1)　サミング指導における教師自身の評定

教師自身がサミングの指導を行って、子どもの学習の達成感％や満足度、技術的なレベルなどを総合的に判断した自身の指導力に対する評価を尋ねた。

回答結果は、評定５は11人（１％）、評定４は185人（16.6％）、評定３は405人（36.3％）、評定２は416人（37.3％）、評定１は32人（2.9％）、回答なし66人（5.9％）であった。

評定５と評定４（全体の17.6％）の教師はサミングの指導がうまくいっているという手ごたえを感じていると考えてよいだろう。注目すべき点は、評定２と評定１（全体の40.2％）の教師がサミングの指導がうまくいってないと自己評価している点である。４割の教師が自分の指導に自信がないあるいは問題があると感じていることは看過できない問題だといえよう。

(2)　使用教材について

これは教科書も含めてサミングの指導ではどのような教材を使っているかを尋ねたものである。

回答結果は、教科書のみの使用は381人（34.2％）、教科書と市販の教材集（曲集）の両方の使用は589人（52.8％）、市販の教材集（曲集）のみの使用は129人（11.6％）、その他は16人（1.4％）であった。教科書のみの使用が全体の３分の１あるが、例えば現行の教科書ではサミングの

学習のページは２ページのみである。授業時数で考えると多くて２～３時間（１時間は45分授業）が限度であろう。リコーダーを使った授業そのものの時間数がどの程度かはわからないが、歌唱に費やす時間と比較してかなり少ないことが推測される中で、サミングを教科書のみの教材で学習を進めるのには指導の不十分さは否めないだろう。

市販の教材集（曲集）の教材名の記載に、「笛星人」[3]が216人あった。「笛星人」は導入期の指導用に書かれた北村俊彦作曲の教材集だが、使用する音域は低いド～高いレで、サミングは使用しない。つまり、サミングの学習に使うことができない教材集を、216人の教師はサミングの指導に使っていると回答していることになる。勘違いにしてもあまりにも多い数字である。果たして現実のところ、サミングの指導はどの程度行われているのだろうか。

(3)　指導上の悩み等について

これはサミングの指導で困っていることを記述式で尋ねたもので、教師のホンネが記入されることを期待した。回答数は482人（43.2%）であり、この回答率がどの程度なのかは先行研究がないために比較できないが、482人の回答内容に14の共通のものがみられた。それらを内容別に３つに分別した。

ⓐ　サミングに関する技能や知識に関すること

①　どのようなサミングが良いのかわからない。

②　子どもに教えることができない。

③　子どもへの説明方法がわからない。

④　親指の爪を立てる方法しか知らなかった。

⑤　自分（教師）が上手く出来ないので、指導に自信がない。

⑥　子どもが上手く出来ているのかどうかわからない。

⑦　サミングのことがわからない。

ⓑ　子どもへの対処の方法に関すること

⑧　高いミと高いファはサム・ホールを塞がなくとも音が鳴る。

⑨　強く吹いてしまって音がやかましい。

⑩　曲の中で出来なくなる子が多い。

⑪　どうしても音が出ない子がいる。

⑫　爪の長い子が多く、親指を横にしたまま上下させる子が多い。

ⓒ　授業の進め方に関すること

⑬　慣れるまでやる気を持たせながら授業を進めること

⑭　どのような教材を使ってよいのかがわからない。

これら一つ一つがサミングの指導に関する教師の切実な悩みである。子どもを目の前にして実践しているからこそ生じる様々な悩みがあることがわかる。

3．考　察

サミング指導における教師の自己評価の様相を質問紙上の回答から見てきたが、この調査からはサミングの指導については多くの悩みを持ちながらも、子どもと格闘する教師の現実の姿とともにいくつかの問題点が浮かび上がってきた。この問題点を整理し、その要因を考察してみた。

(1)　**サミングに関する技能や知識**…教師の悩みで圧倒的に多いのがこの点である。技能や知識の不足が指導における自信のなさにも影響をおよぼす。サミングの指導がうまくいってないと感じる教師が4割もいる現実がある。サミングについて教師自身が研修する機会があまりにも少ないのも事実である。しかし、これらの不足は個人の努力でかなりの範囲で解消することが出来ることがほとんどである。筆者は22年間小学校現場に勤めていたが、実践で壁にぶつかり、問題を解決すべく自分なりに職場の先輩やリコーダーの演奏家に教えを請うことが多かった。そのような実情は今も昔も変わらないだろう。この調査は9年間にわたって行ったものであるが、質問紙を集計するたびに同じような悩みが記載されていることがわかった。問題とすべきことは、教師自身の問題解決に向けて教師がどれだけ努力をしているかではなかろうか。教師の研修の機会と教師自身の研修の努力については今後の課題として別稿で論じたい。

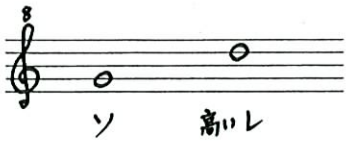
(2)　**子どもへの対処**…子どもの現実の姿を見れば見るほど一人一人皆違うことがわかってくる。「リコーダーを強く吹いてしまって音がやかましい」場合に、弱く吹けばいいよと言うだけで音が改善される子どももいれば、個人的に時間をかけても「やかましい」音は変わらない子どももいる。このようにすれば一度に問題は解決するといった、特効薬のような指導のノウハウを教師は求めすぎてはいないだろうか。子どもは皆違うのであるから、教師は、一人一人の子どもとこれまで以上に接して子どもを理解することこそが、むしろ指導のノウハウ以上に重要だと思うのである。このことには時間もかかるし、子どもを見る眼を変えることも余儀なくされるだろうが、教師自らの子どもに対する姿勢をふり返る絶好の機会ともなると思うのだがどうだろうか。

Ⅲ　学習初期の子どもの実態

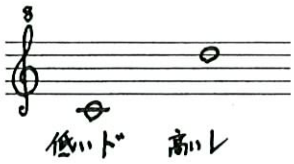
1．「がんばって」のマイナス効果

子どもにとってサミングはどのようなものなのだろうか。

（楽譜3）



（楽譜4）



現在、サミングの学習時期は概ね小学校４年生の１～２学期に行われている。

それまでの学習音域は、ソ～高いレ（楽譜３）、あるいは低いド～高いレ（楽譜４）で、指使いは左手のみあるいは両手を使用するが、いずれの場合でも左手の親指はサム・ホール（親指穴）を塞いだ状態で他の指を動かしてめざす音を発音する。よって子どもは動かさない左の親指については全く意識しないで、他の指の動き（言い換えればサム・ホール以外の指穴の開閉）にのみ集中して楽曲を演奏すればよかったのである。

子どもにとってサミングを学習することになると、それまで吹いたことがなかった新しい音（高いミ）を出すことができるというううれしさと共に、全く意識しなかった左の親指も動かして音を出す困難さも受容しなければならなくなる。サミングの学習は新しい音が出せるうれしさと比べて余りある困難さも内包しているのである。親指を動かそうと意識をすれば子どもは親指に力が入る。教師は「がんばろうね」と声をかけることが頻繁にあるため、子どもの親指への緊張感はますます高まり、一生懸命に「がんばって」高いミの音を出そうとする。その時は穴を塞いでいる両手指だけでなく、子どもの心もからだも硬くなり、高いミの音を出した時は非常に強くてきつい音が発せられてしまうのである。教師の「がんばれ」に応えて「がんばった」証しでもある高いミの音は「鳴った」のだから、子どもにとってはそれなりの満足感が得られる。かくして子どもにとって高いミの音は「強く吹けばなる」音だという印象が刷り込まれていくのである。

リコーダーの構造上高いミから上の音はほとんどサミングが必要だが、サミングをしないで（サム・ホールを閉じたままで）強く吹いても音はなる。子どもはこの事実を教師の「がんばれ」をきっかけにして体験することになる。高いミの音の質を子ども自身が問うことなしに、音が鳴りさえすればよいという意識だけが残り、音を作るためにサミングをする必要性は子どもからなくなっていくのである。

２．対面授業の死角

音楽の授業における学習形態も、子どもがサミングをして吹いているのかどうかの確認を困難にさせている。教師と子どもが対面している形で授業が行われている場合（この形態がほとんどだが）、教師からは子どもの左手親指やサム・ホールは見えない。教師にとってはサミングをしているかどうかは目視できないのである。高いミの音が鳴っているかどうか、その音だけが頼りとなる。一方、子どもは教師がサミングをして音を出すように指示があっても、音が鳴りさえすればよいという意識と教師からは自分の左手親指の動き等は見えないという状況判断とから、高いミより高い音はサミングをしないで「強く吹いて」音を出すことが日常的になっていくことになる。

リコーダーを吹く子ども自身が音の質を意識して吹かない限り、たとえ教師が子どもの演奏する音の質を的確に判断しようとも、サミングの学習の本質は形骸化されていくことになるだろう。教師の指導の質がここで問われるのである。

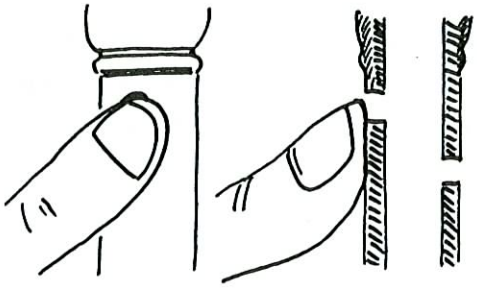
Ⅳ　サミングの指導のあり方と教材開発

2002年４月より施行される学習指導要領[4]の第３学年及び第４学年の指導事項では、リコーダー抜きで「音色に気を付けて、旋律楽器及び打楽器」の演奏を指導することが実質上不可能である[5]。それだけに学校現場において早急に解決されるべきサミングの指導、ひいてはリコーダー指導における課題の一つは、前述した子どもの実態と教師の自己評価から推察できる指導上の問題点をどう克服し、子どもの現実の姿を中心に据えた指導のあり方を検討し、その教材開発を如何に行うかであろう。そこで現在の子どもの身体的生理学的状況も含めたサミングの指導のあり方を検討し、そのうえで教材開発の視点とその教材を考える。

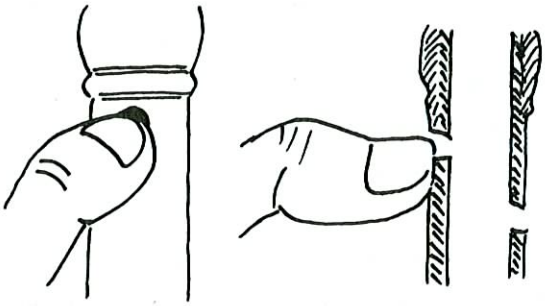
１．現行教科書におけるサミングの方法

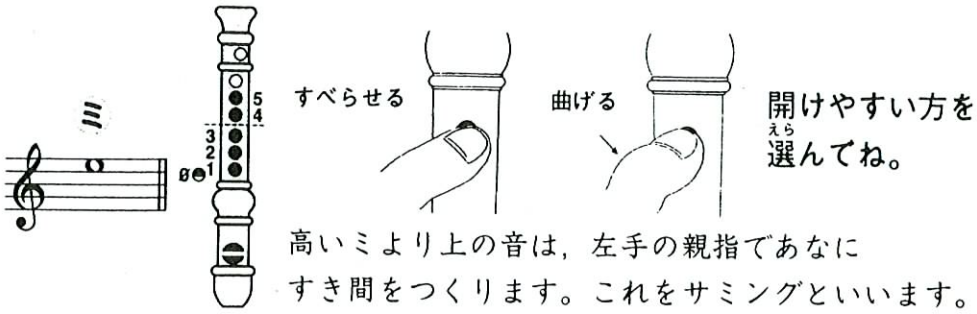
サミングを行う上での技術的方法は、２通りある（図１・図２）。図１は親指を滑らせてサム・ホールに隙間を作る方法で、図２は親指の間接を曲げて行う方法である。現行の教科書では、教育出版[6]（図３）はこの２通りの方法を、教育芸術社[7]（図４）と東京書籍[8]（図５）は図２の親指の間接を曲げて行う方法のみを紹介している。ここで考えたいことは、子どもにとってサミングを行う方法はどうあるべきかである。

（図１）

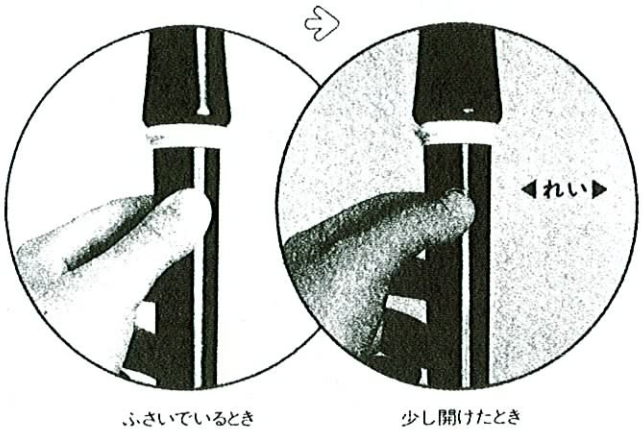


（図２）

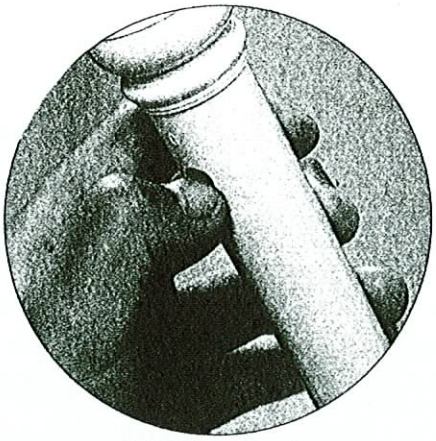




（図３）　教育出版



（図４）　教育芸術社



うらあなの開け方

（図５）　東京書籍

リコーダーは作音楽器といわれるように、自分の息で音を作り出すことが楽器の命である。息の強弱や体の様々な部位の状態、気持ちの持ちよう等によって音の高さや音色、響きが変わるものであるから、サミングをするとしないとで、作り出す音そのものに大きな差異があってはいけないのである。忘れてはならないことは、「サミングはこのようにしなければならない」のではなく、「音を作り出すためにサミングをする」のである。よって、指導においては子どもには自分に適したサミングの方法を選択させたいし、またその子なりの方法があってもおかしくはないと考えるべきであろう。このような視点で教科書の記述をみてみると、２通りの方法が紹介され、「開けやすい方を選んでね」とある教育出版の方がより教育的といえよう。

２．子どもの身体的状況から生まれた新たなサミングの方法

サミングの方法は前述した２通りと考えられてきたが、近年、子どもの様子を観察していると（図６）のような親指の身体的状況が見うけられる。この子にとっては最もサミングが行いやすい方法は、親指の先をほんの少し反らすだけである。この方法は子ども自身が試行錯誤しながら見つけた方法で、サミングを行う音響的原理は同じである。実際に子どもが吹く音を筆者も聴いてきたが、前述の２通りの方法で行った時の音と何ら違いはない。

（図６）

このような親指の先を反らす方がサム・ホールに隙間を作りやすい子どもは、統計を取ってはいないが、筆者の経験から推測してクラスの全体の１～２割程度はいると思われる。指導のあり方を子どもの実態から出発して考えるというスタンスをとるならば、サミングの方法は少なくとも３通りあると考えてもよいのではないだろうか。

３．音を聴きながら試奏する重要性ー指導の実際

リコーダー指導で最も重要なことは、演奏する子ども自身が自分の作り出す音を聴きながら行うように指導する点にあろう。このことはリコーダーを使って音を作り出すことと密接に結びついており、リコーダーの導入段階から指導すべきことである[9]。リコーダーが作音楽器といわれ

る所以もここにある。サミングの指導も例外ではなく、子どもにとってはじめてサミングを学習する時の指導では、自分が作り出す音を注意深く聞きながら吹くように、くり返し子どもに伝えることが必要である。このことを前提に、息のスピード（強弱）とサム・ホールの隙間の開け具合を子どもにどの程度でうまい具合に音が鳴るかを意識させながら指導を行うことが重要である。筆者が開発した指導の要点は次の通りである。

① ソの音を吹きながら、左手の親指で少しずつ隙間を広げていく。息のスピード（強弱）はソを吹いているときと同じくらい。

② 左手の親指で塞いでいるサム・ホールは、「ほんの少し、髪の毛３本ぐらい」の隙間が開くと、音が変わる。ひっくりかえったような感じの音がする。その音が高いソである。

③ 高いソの音に変わった時吹くのをやめて、手の指はそのままにして左手の親指とサム・ホールとの隙間を自分で確かめる。あるのかないのかがわからないほど細い隙間であることを確認する。息のスピードは低いソと同じであることも同時に印象づける。

④ もう一度①からやってみる。

⑤ 何度か繰り返すうちに、やさしい高いソの音が鳴ってくる。

⑥ 次に低いミの音で同じ手順でやってみる。

⑦ 子どもには、サミングをする時は「高い音は弱く吹こう」と言ってちょうど良い程度である。

４．教材開発の視点

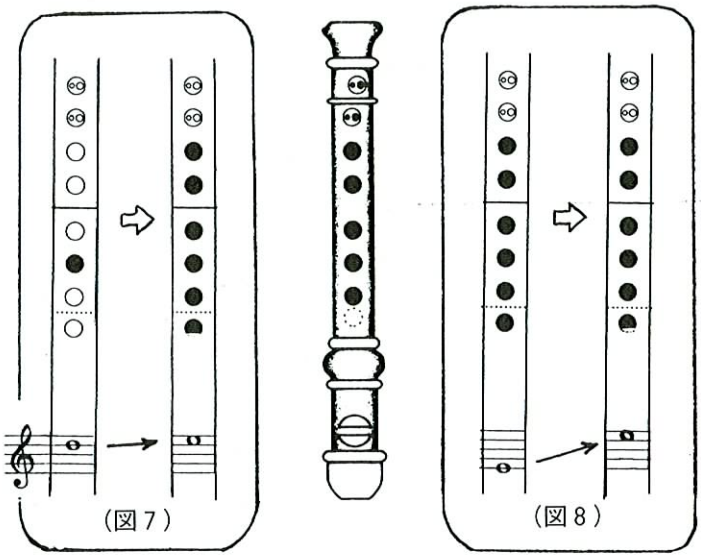
(1) 運指は指の動きの連続として

筆者はかつて子どもにサミングの方法を指導した後、子どもが左手の親指を動かしてほんの少しの隙間を開けることができ、高いミの音や高いソの音が鳴らすことができるようになってきたと安心していたことがある。その時点で一人一人の子どもの現状を見ようとはせず、クラス全体として高いミやソの音がうまくなっているかという視点でのみ見がちになった。それは具体的な子どもの姿を見ようとしているのではなく、抽象的な全体の輪郭だけを見ているのと同じであった。

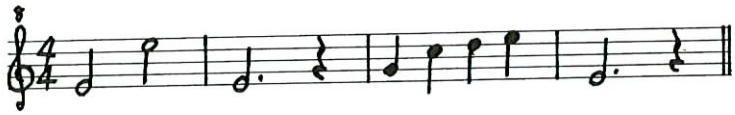
高いミの音が含まれている練習曲を指導し始めた時、高いミの音の所で子どもはつまずくのである。始めから繰り返して演奏しても、やはり同じところで子どもはつまずいた。指使いは、音と音との繋がりの中の一点に過ぎないことを思い出した。「ある音から別の音への移動はリコーダーを操作する指の動きの連続として捉える」[10]ことは、サミングの指導においても有効であることに気がついたのである。つまり、曲の途中に高いレの音の次に高いミの音が続いている時の指の動きは非常に難しく、高いミの音一音だけをうまく鳴らすことができても、同じようにはいかないのである。

音から音への繋がりを指の動きの連続として捉えると、高いミの音の指使いが最も困難な動き

となるのが「高いレ→高いミ」(図７）であり、最も容易な動きが「低いミ→高いミ」(図８）である。サミングの指導においては、音の繋がりを指の動きの連続として捉えることを基盤にした教材の開発が必要とされている。



（楽譜５）



(2)　興味・関心を生む編曲で

これまでサミングの学習のための教材は（楽譜５）のように左手の親指を動かすことに重点が置かれ過ぎて、親指の機械的な動きの訓練のためだけの練習となり、教室は非常に無機的な学習の場となりがちであった。教材そのものの面白さや楽しさといった子どもの演奏する楽しみは、サミングに慣れてから別の教材で扱う傾向が強かった。これは演奏するまでには奏法も含めた基礎訓練が必要で、ある程度のレベルになってから（基礎ができてから）本来の演奏を行う、という演奏家のための学習過程が基になっている。従来の学校教育における音楽科の授業はこれを基にして、演奏の間違いを無くすことに主眼がおかれた授業が展開されてきた[11]。「サミングに慣れてから」でないと演奏の楽しみを享受できない授業が展開されれば、いつまでも演奏を楽しめない子どもが続出することだろう。かつて「学校の音楽は嫌いだけれど普通の音楽は好きだ」という感想を多くの子どもが抱いていた音楽の授業をわれわれは繰り返してはならない。サミングがうまくできなくとも楽しめる教材や授業を開発することが急務ではなかろうか。

教材開発で忘れてはならないのは、子どもの興味・関心である。子どもが積極的にサミングを

学習したくなるような、興味・関心が持続するような、子どもの言う「かっこいい」教材が必要である。それには旋律のよさだけでなく、子どもがリコーダーを演奏する時に盛り上げる「かっこいい」伴奏が必要不可欠である。伴奏次第で子どもの意欲が増減するといっても過言ではない。教材には伴奏も含めた開発が必要である。

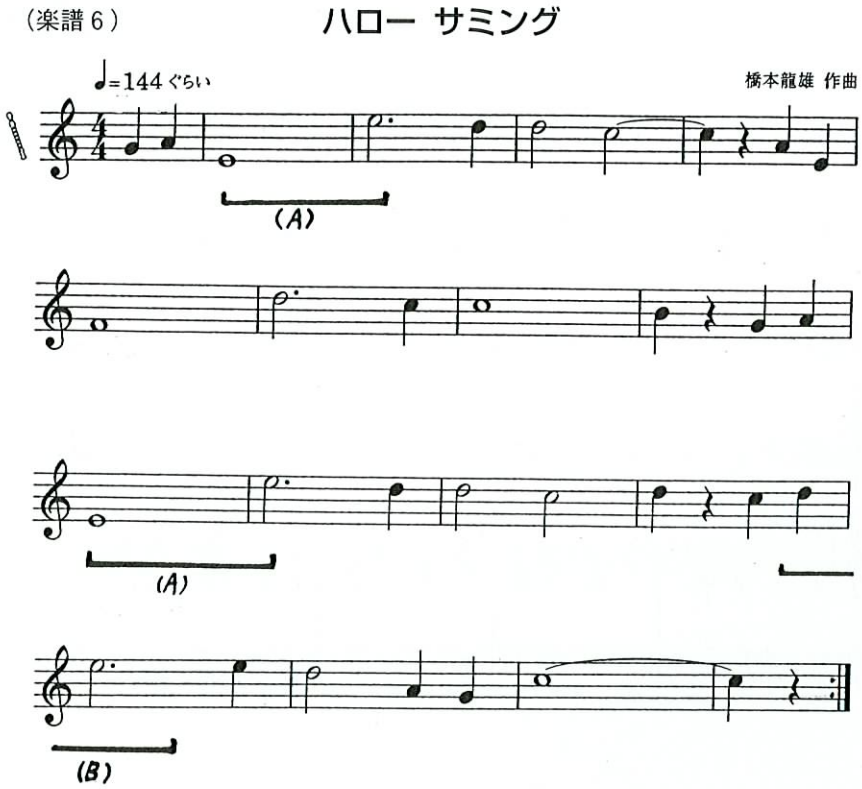
5．開発教材「ハロー・サミング」

前述した２つの教材開発の視点を念頭において、サミングの学習教材を開発した。

(1)　教材開発の視点(1)の観点から

（楽譜６）はソプラノ・リコーダーのための楽譜である。「ある音から別の音への移動はリコーダーを操作する指の動きの連続として捉える」[12]ことを基にすると、弱起を含めて２～３小節目にかけての「低いミ→高いミ」の高いミでのサミングの指の動きが最も容易なパターンである(A)。このパターンは３段目１～２小節目にもある。次に高いミの音の指使いが最も困難な動きとなるのは、３段目４小節目の４拍目～４段目１小節目の１拍目にかけての「「高いレ→高いミ」のパターンである(B)。この曲を１回演奏する毎に、指の動きが最も容易な(A)パターンが４回、最も困難な動きの(B)パターンを２回演奏することになる。

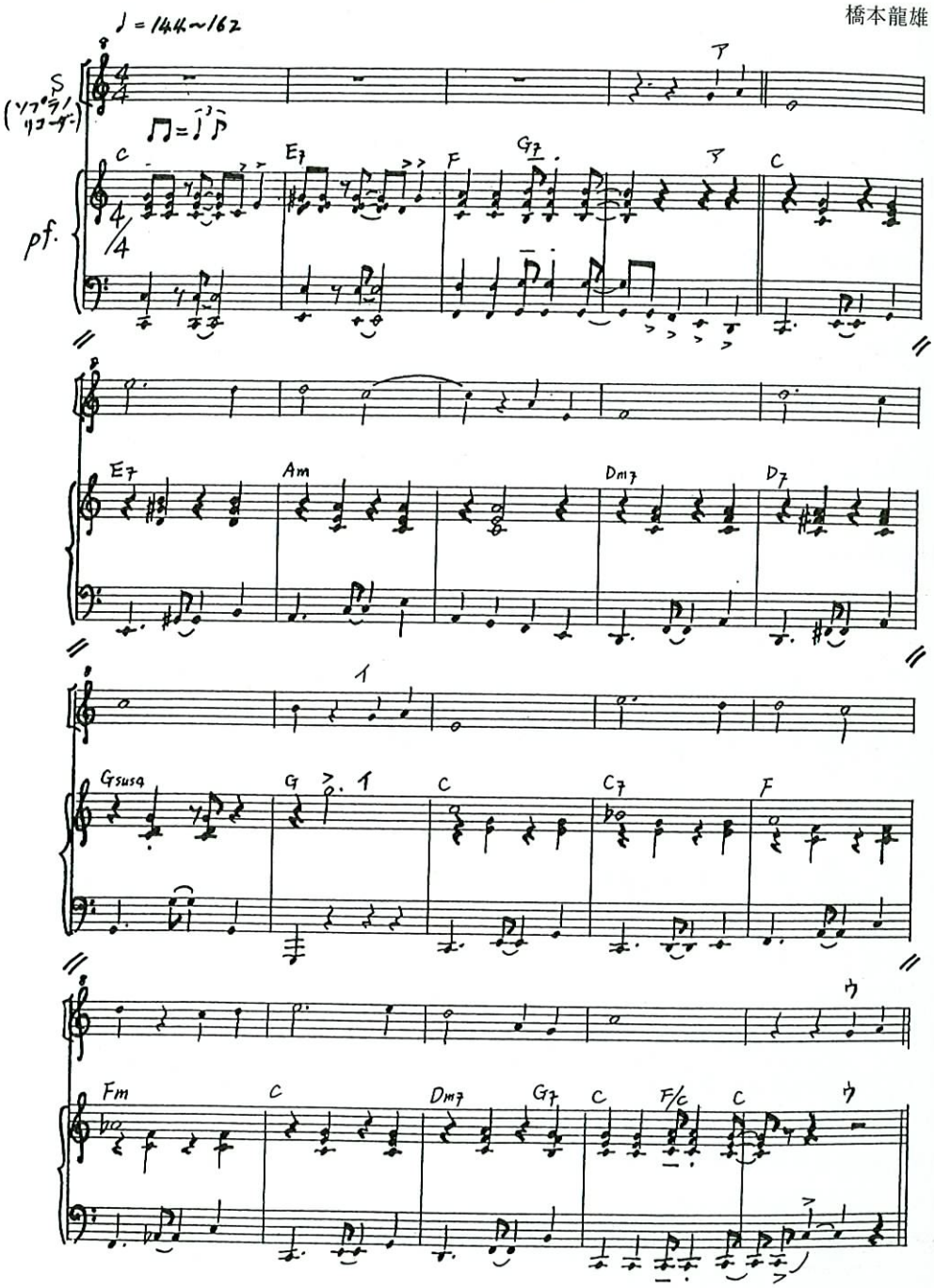
（楽譜６）

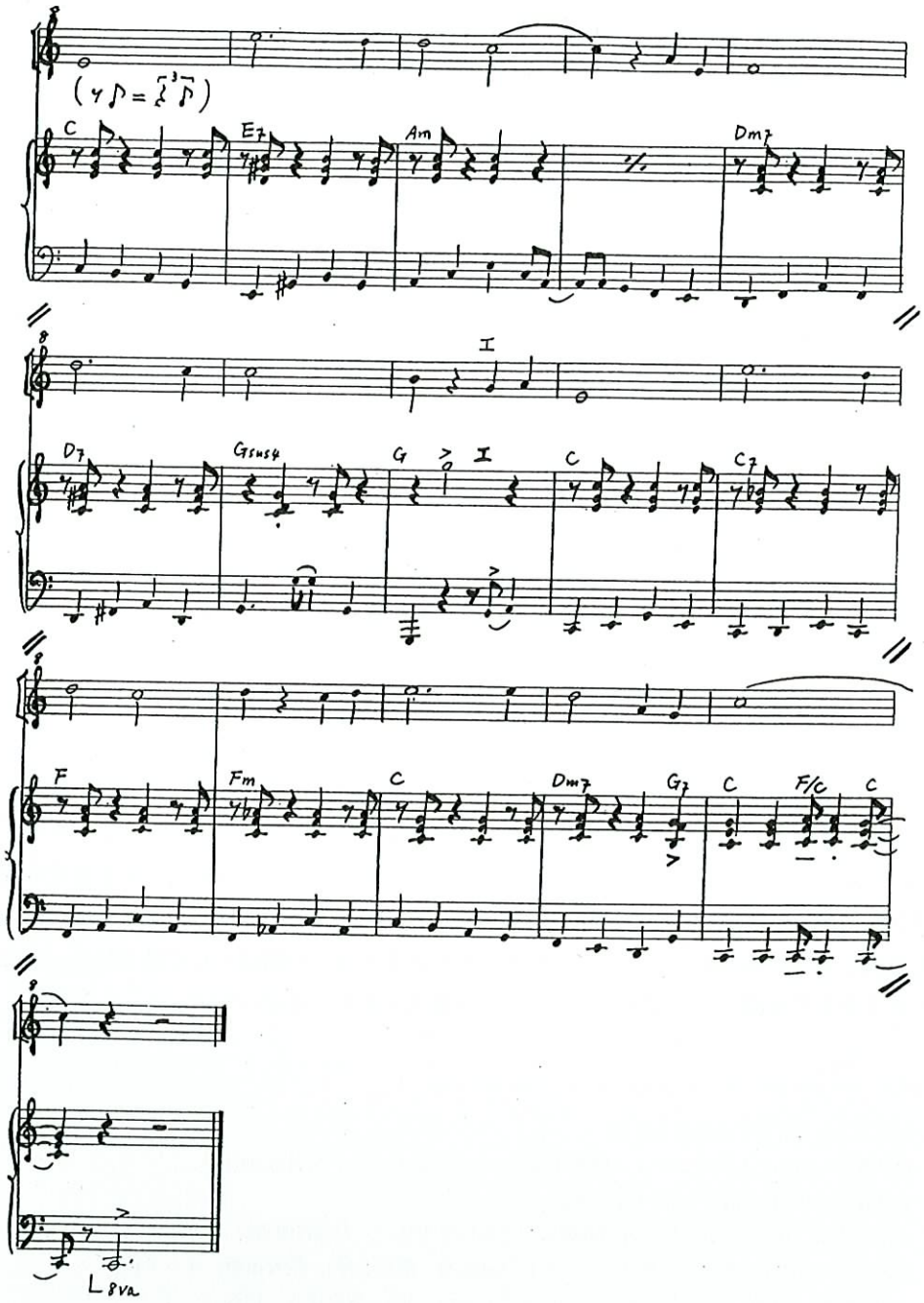


（楽譜７）

ハロー サミング

橋本龍雄




C
E7
Am
Dm7
D7
Gsus4
G
C
C7
F
Fm
C
Dm7
G7
C
F/C
C
8va

(2)　教材開発の視点(2)の観点から

（楽譜７）はピアノ伴奏用の楽譜である。ベースの動きに特徴を持たせ、楽曲全体を躍動感のあるノリやすい雰囲気にした。主旋律は繰り返すが、繰り返した後半の演奏も新鮮な気持ちで演奏できるよう、前半（ア・イ）と後半（ウ・エ）で違う伴奏を考えた。特にベース・ラインには「かっこいい」と感じる子どもが多いウォーキング・ベースを取り入れた。

この教材の伴奏はピアノだけでなく、MIDI 音源を使用したオーケストラ版も作成した。

Ⅴ　まとめと今後の課題

前稿では導入期以降のリコーダー指導のあり方が今後の課題として残されたが、本稿ではこれをうけて、実践上の技術的側面として避けては通れないサミングの指導に焦点を当て、教師の指導の実態と学習初期の子どもの実態を明らかにし、リコーダー指導におけるサミングの指導のあり方を考察した。またサミングの指導における教材開発の視点を検討し、それに基づいて開発した教材「ハロー・サミング」を提案した。教師の指導の実態については、1,115人の教師から切実な実践上の悩みを知ることが出来た。子どもを目の前にして実践しているからこそ生まれる様々な悩みをどのように解決していけばよいのだろうか。解決への糸口が見えないことのほうがむしろ多い学校現場で、苦しみながらも毎日子どもと格闘している教師がいる。一方、子どもの生の姿を見ようとしないで、ひたすら教科書をこなす教師がいるのも事実である。子どもの実態を知ることなしに明日の授業の計画は立てることが出来ないのと同じように、今学校現場の教師が直面している様々な切実な問題を知ることなしに、教育のあり方を討論することは出来ない。

今回はサミングの指導のあり方に焦点を当てて考察したが、現場の教師の声が、指導のあり方を考える上で重要なヒントになることがわかった。今後教育に関わる研究を進めるにあたっては、子どもの現実の姿と共に、子どもを指導する教師の姿を出来る限り直視する必要がある。

2002年４月から実施される学習指導要領により、小学５・６年生の音楽の授業時数は現在より20時間も減少する。そのような環境の中で行われるリコーダー指導はどうあるべきだろうか。研究の方法とともに高学年のリコーダー指導のあり方が実践上の問題として残された。また、「どうしてもうまく出来ない子どももいる」という事実も忘れてはならない。

1　例えば「教育音楽」音楽之友社刊。

2　現職教師を中心としたリコーダー研究団体。1975年に設立され、会員数約640人。

3　北村俊彦（1993）「笛星人」，トヤマ出版。

4　文部省告示（1998）「小学校学習指導要領（平成10年12月）」，大蔵省印刷局。

5　橋本龍雄（2001）『音色を作るリコーダー』「Spire_M　創刊２号」，教育出版，４～７頁。

6　三善晃監修（2000）「小学校音楽　音楽のおくりもの　４」，教育出版，13頁。

7　畑中良輔他（2000）「小学生の音楽４」，教育芸術社，28頁。

8　湯山昭他（2000）「新訂新しい音楽４」，東京書籍，26頁。
9　橋本龍雄（2000）「21世紀の小学校におけるリコーダー指導のあり方についての提案－導入期における教材開発を通して」，福井大学教育地域科学部紀要，第Ⅵ部芸術・体育学（音楽編），第33号，６頁。
10　前掲書，７頁。
11　前掲書，７頁。
12　前掲書，７頁。